

梶谷真司 著

『考えるとはどういうことか
0 歳から 100 歳までの
哲学入門』

幻冬舎新書、2018 年

262 頁、840 円（税別）

至って誠実なタイトルに、大風呂敷の副題がついている。0 歳や 100 歳とはいくらなんでも哲学を押し付けすぎではないか。しかし本書を読み進むにつれていくと、「哲学」のとらえ方が徐々に更新されていくだろう、もしかしたら読了後に表紙を見たとき「生前から死後までの哲学入門」でもないのではないかとさえ思うかもしれない。

本書は哲学対話の優れた実践書であり手引きである。と同時に、哲学すること、考えることは一体どういうことかについて考える哲学書でもある。哲学の教授である著者が哲学を問い直すというのだから、プロサッカー選手がサッカーとは何かと自問するようなものだろうか。そう思うとずいぶん変な話に感じるが、哲学は「何か知ったつもりでいるもの」を改めて吟味することであるのならば、哲学という刃の切っ先がまず自らに向けて「考えるとはどういうことか」と問いかけたとしても、それほど不思議ではない。それどころか哲学者はもっとこの問いを考えるべきだとさえ思える。ところがそのような問いや答えは、対話の活動を通して「私自身、初めて分かった気がした」（四頁）という。偉い人が実は分かっていたと告白

するときほど安心するものはない。

しかしなぜ著者でさえ、考えることや話すことについて、哲学対話の活動を始めるまで重要な気づきを得られなかったのだろうか。それまでたくさん行われてきたゼミや討議などと哲学対話との違いは何だろうか。哲学対話で得られた感覚とはどのようなものなのか。本書は「哲学入門」と銘打たれているが、哲学史の初歩的講義などではなく、まさに哲学することそのものを読者と共に確かめるような中身になっている。その点でまさに哲学入門である。

さて、ふつうの会話などと哲学対話の違いは何なのか。第一章「哲学対話の哲学」では、哲学対話の八つのルールが紹介される。これらのルールが「全体として対話を哲学的な探究に変える」（四七頁）のだが、逆にいうと、これらのルールが全体的に意識されていないと私たちは哲学的に探究することから遠ざかってしまうのだ。問うことや考えることから私たちを遠ざけている原因の一つとして、日本の学校教育が痛烈に批判されているが、ここは元生徒として誰もが思い当たるところだろう。私も教員として、残念ながら現在でも否定できないところである。

ともかく哲学対話のルールは私たちを自由にする。私たちは、これらのルールのおかげで、ふだんの不自由さから一步離れて考えられるからだ。第二章「哲学の存在意義」では主に自由について論じられるが、自由の概念ではなく感覚について論じられた議論とこれに続く責任についての議論は、本書の前半部のハイライトをなす。

「ただ自由だけを求めるのでも、責任だけを甘受するのでもなく、その間で妥協するのでもなく、

自由と責任をいっしょに取り戻す。それは他でもない、自分自身の人生を生きることなのだ」(一〇四頁)

考えることについて始まった議論は、自由と責任の全体的な取り戻しについての議論となり、それが最終的に自分自身の人生を生きるという問題に行きついた。しかも自由で責任ある自分の人生は、他者という邪魔者を切り離して確保されるのではなく、「他者と共に享受する権利」(一〇四頁)を伴うものとして、積極的に取り戻されようとしている。

ここにおいて読者は、対話の場で共に考えることによって自由と責任を取り戻すだけでなく、近代的な個人の権利を越えた共同的な権利の引き受けという試みを提示される。もしそのような試みに乗ってみるのであれば、後半の第三章と第四章は頼もしい手引きとなるだろう。

第三章「問う・考える・語る・聞く」では、対話の実践における基本的なことがらについて、解説されるよりむしろその難しさが暴かれることによって、これまでの対話観が解体され、再構築されていく。そしてこの過程をたどることで前半部の議論が実感をもってよりよく理解されるようになるだろう。

第四章「哲学対話の実践」では、実際に哲学対話を行うための具体的な手順などが丁寧に紹介されており、自分でもやってみようという読者の背中を押してくれる。実際、インターネットで検索するとたくさんの哲学対話、哲学カフェの場を全国に見つけることができるようになった。そこには様々な哲学カフェが開かれていて、もっと多様な対話の場と対話の相手も存在する。それは「私

たち」が現に共に生きており、共に生きる中での自由と責任の感覚を取り戻すことに何らかの意義を感じているからだろう。

そういう点では、対話はよりよい人生と社会を作る理想主義的な運動ともいえるが、筆者は決して理想を語って終わろうとはしていない。哲学カフェも、地域の寄り合いも、婚活パーティも、そして本書の執筆もそれぞれが筆者にとって「自由と責任を取り戻して生きるための小さな挑戦」(二五九頁)なのだ。読者はここに自由を取り戻すためのガイドを手にしたが、自由は手にしていない。私たちがいかに自由から遠ざかりやすいかということを実感するまでは、本書を再読することを小さな挑戦にしてもいいかもしれない。

古賀裕也 (かえつ有明中・高等学校)